

## 「天皇陛下御即位 20 年記念パネル」を展示・・・

今年は、天皇陛下が平成元年にご即位され満 20 年目を迎えられました。この御慶事を国民としてお祝い申し上げるため、両陛下 20 年の歩みを「記念パネル」として謹製されております。今回、第 3 回アジア医学検査学会および第 58 回医学検査学会開催にあたり、日本国民である技師会員に、また海外参加者の皆さんにもご覧いただきたく「記念パネル」のコーナーを設けました。

当初は、アジア諸国から参加される方々の歴史的認識を思い躊躇した部分もありましたが、現在の「開かれた皇室」をご覧いただきたいという考えで展示させていただきました。大々的に宣伝することを差し控えたこともあり、多くの参加者に見ていただくことは叶わなかったものの、ご覧になった皆さんには十分「意」は伝わったものと思われま。

## 学会に参加して・・・

今回の第 58 回医学検査学会に参加して、AAMLS 学会の同時開催を知り、受付へ行きました。しかし、そこで参加費を示されて発表を聞くことは出来ませんでした。両学会合わせて 1 日で 30,000 円は私には高すぎました。今後、海外との交流も増え、このような国際学会の機会も多くなると思いますので再考されることを希望するのは、地方から参加する者の勝手な言い分でしょうか？ 【A.K.】

## 皆様、有難うございました・・・

第 3 回 AAMLS 国際学会にお世話いただいた実行委員の皆様ありがとうございます。おかげ様で貴重な経験をさせていただきました。英語での発表はあまりよく分らないで終わりましたが、パーティは楽しかったです。外国の方とあのような場でコミュニケーションをとれたのは幸せでした。でも参加者が少なくもったいない感じがしました。せつかくの懇親会だったので第 58 回学会と一緒に出来たら良いのと思いました。次はシンガポールだそうですね、おもいきって出かけてみようと思っています。 【Y.K.】

## 久しぶりの学会参加・・・

横浜への学会参加は確か 2 回目になるだろうか？ 遠い昔で覚えちゃないが・・・チト前ならラララ～港のヨウコ～横浜 横須賀 ♪～

道東の涼しい（寒い）地から、暑い横浜（関東エリア）に行くには、覚悟が必要だ！ 10 度以上の気温差に、耐えられる、身体年齢であろうか？

だがしかし、行かねばならぬ。今回は発表だ！ 数多くの演題から、何を拝聴しようかしらと時間との調整でプライオリティーを決定。

さてと・・・と、ウロウロしている間に、ランチョン整理券は完売(?)

抄録片手に、入場すると、なんとマニアックな、発表だろう、なんときめ細かなデータ集積だろうと感心しながらも、シニア諸氏の「質問でない質問」に、いささか閉口！

後輩の発表を叱咤激励する気持ちはわからないでもないが・・・貴方の知識を披露する場では・・・？ と苦笑い。後日ご指導しても・・・と思ったりして！

現在 我々臨床検査技師も、色々な資格試験、認定試験のもとに、より専門性を持ち、より細分化され、他の専門学会での発表も珍しくない。そこでこの専門家は一般技師の知識の比で、ないのだろう。しかし我々の職場は（人生いろいろ。職場もいろいろ）どこまでもアカデミックを追求する専門性と、general との狭間で、本家本元の当学会の行く末はいかに！ 閑散とした開会式を垣間見フト思った数日であった。

学会の実行委員のアロハシャツはサミットのようで、目立ち、目印となり斬新で“good idea”ご苦労様でした。 【釧路赤十字 HP Y.Takabuchi】

## 学会に参加した学生さんから・・・

拝啓 晩夏の候 先生におかれましては益々清祥のこととお慶び申し上げます。

この度はアジア医学検査学会及び日本医学検査学会に参加する機会をいただき誠にありがとうございます。

数々の講演を通して、医学は日々進歩していると改めて実感させられました。また、その進歩においては臨床検査の貢献が大いに関わっていることもよく理解できました。

特に、アジア医学検査学会の学生フォーラムにおいては、アジア諸国の学生の方々は自らの意志をしっかりと持ち前向きな姿勢に圧倒されました。私たち日本の学生も更なる積極性を持って勉学を深めていかなければならないと痛感しました。

今回の参加では、勉強不足のために解らない点もありましたが限られた時間の中でも学会という場に身を置くことにより、より多くのものを得ることが出来ました。今後の臨床検査を担う私たちにとって、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。この貴重な経験を活かし、将来は世界を視野に入れた臨床検査技師として医療に貢献していきたいと考えています。書面では失礼と存じますが、学生を代表してお礼もうしあげます。

平成二十一年八月四日

東洋公衆衛生学院臨床検査技術学科二年 山村諤子

敬具

## 「康子 19 歳 戦禍の日記」

## 第 58 回学会に思う・・・

栗屋康子 19 歳、昭和 20 年 8 月広島で被爆した母親を口移しで人工呼吸を施すなどの懸命な看護を続けた。やがて、彼女は二次被爆し自らの命を散らすこととなる。現御茶ノ水女子大の前身である東京女高師附属専攻科の康子は、当時、勤労働員されていたが戦局悪化に伴い新潟県へ疎開していたが、家族の悲報を受けることになる。父は広島市長であった・・・これは、門田隆将作「康子 19 歳戦禍の日記」(文芸春秋社)である。この献身さは家族のためなのか、彼女自身がクリスマスチャンであったためなのかは、今や彼女の「心」に秘められたものである・・・

さて、学会初日の 7 月 31 日午後の出来事である。学会会場のパシフィコ横浜の「死角」ともいえる石の階段で男性が倒れた。3 階からその一部始終を目にしたスタッフ(日臨技役員)が AED を手にして駆けつけた。倒れた男性は、心臓障害ではないようであり、意識もあり腕と足のシビレを訴えていた。駆けつけるには数分間が必要であったが、問題は、その現場に学会へ参加していた検査技師の姿があったことだ。男性の横に立つ検査技師の姿と、それをすぐ上の階段で眺める検査技師の姿は医学検査学会にはそぐわないものであった。脈を確かめる・・・声をかける・・・意識を確認する・・・周囲の者に助けを求める・・・などの行為は「助ける」第一歩で、一刻の猶予もないはずである。倒れた男性の「学会へ来た」という言葉から、“けんさ EXOP '09”へ参加するためであったのでは。各都道府県技師会では公益事業として「AED 実技講習会」を実施している。公益事業とはいえ、当然、医療人としての研修の場でもある。

長年にわたり日臨技は「医療技術は国家資格のある者の手で」と訴えてきたが、ここ数年、医療行政は救急医療や介護の域において一般国民や家族でも医療行為が行えるように規制緩和を進めている。医師、看護師を中心とした医療職種不足と説明しているが、資質の低下も大きな要因と考えるべきではなかろうか。意識は「ある」では何の意味も無い。「意識の覚醒」が重要である。

【高田鉄也】